

言葉が消えていく

坂田三允（長野県看護大学）

つい先ごろのことである。若者と話をしていた「やもたてもたまらず」といったら、それ何ですかと聞かれた。「嘆かわしい」といったら、それもわからないといわれた。二の句が継げなかった。それからしばらくして、同年代の友人と話しているときに「電車のドアの前にペタリと座りこんで通路を塞いでいる高校生に腹が立つ」といったら「あなたも年をとったわね」といわれた。

いつの世でも、年寄りとは若者文化に難癖をつける。私たちが若かったころも、「いまだきの若い者は…」といわれていたのだと思うが、そのときは聞く耳を持たなかったから、何をいわれていたのかは覚えていない。そして、いま、「年をとったわね」といわれるようになって、人生の先輩の声に耳を傾けてみたくなった。

著者が連載している「週刊新潮」の写真コラムは、ときどきしか読まないけれど、辛口で過激ななかにユーモアもあって、反論したいことはあっても腹が立つことはない。この書の帯封にも、「まじめな話をまじめくさって真顔でするのは失礼だ、著者は終始笑いのうちに戦前を語る」とある。「物を知らぬ世代の代表者」である若い女子社員を相手に語る著者の話の内容は極めてまじめなものなのだが、まじめな書にありがちな遠回しな表現やまわりくどさは微塵もない。すべて直球、歯切れよく、あきずに読める。

この書を読んで思った。「嘆かわしい」がわからないいまの若者にとっての戦争は湾岸戦争だが、私も戦後世代だから、著者が語るころの

戦前はおろか戦争も知らない。著者からみれば、私たちの世代が現代の若者批判をするのは、おそらく「目くそ鼻くそを笑う」ようなものに違いないだろうと。

けれども著者が、「ひとえに言葉が減びたから」現代の若者に戦前を伝えるのはもう不可能なのではないかと、半分以上あきらめモードで語ってくれる戦前は、「敷布団に敷布はまだかけてない。（中略）…布団のかわをはいで洗い張りしなければならぬ。かけ布団の襟にはピロートドが張ってある」などのエピソードにあふれ、戦後間もなく生まれた私には妙に懐かしさを感じさせてくれるものであった。もちろん、「電気冷蔵庫第一号は昭和五年東芝が七百二十円で売り出した」など初めて聞く話のほうが多く（誰が購入したのかまでは書いてないのが残念だが）、それはそれで学校では決して教えてくれない「生活している人々」の歴史としておもしろかった。だから何なのといわれればそれまでだけれど…。

また、著者はいう。「いま私たちの間には共通の歌、共通の古典、つまり共通の言語がありません。これは実は一大事なんです」。共通の言語がないというのは、その言葉にこめられていた微妙な感覚や情緒、ひいては文化が消えてしまうことに等しいのではないのだろうか。「戦後五十年という歳月は老若の互の理解を絶し」てしまったのである。できることなら、私はその溝を埋めたいと思う。新しい年はあえて“口うるさい婆あさん”になってみよう。消えていく言葉を少しでも残したいから。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694